

報 告 書

令和6年3月5日

茅ヶ崎市議会議長
岸 正明 様

都市経済常任委員会 委員長

小川裕暉

令和6年2月9日、都市経済常任委員会の所管に関する有識者との意見交換をしました結果、次のとおり報告します。

1 開催日時

令和6年2月9日(金) 10時～11時30分

2 会場

市議会全員協議会室A

3 参加者及び意見交換概要

別紙報告書のとおり

政策討議に関する意見交換会報告書

日時: 令和6年2月9日(金) 10時~11時30分

場所: 茅ヶ崎市議会 全員協議会室 A

部外出席者: 高井典子(神奈川大学 国際日本学部 教授)

部内出席者: 小川祐暉(委員長)、長谷川由美(副委員長)、杉本啓子(以下委員)、山口順平、
藤本恵祐、加藤大嗣、滝口友美

作成者: 藤本恵祐

【意見交換会テーマ】

「茅ヶ崎らしいツーリズムについて」

【意見交換会次第】

1. 委員長挨拶及び参加者自己紹介(省略)

2. 高井教授からのプレゼンテーション(要旨)

1) 旅行は人の空間的、物理的、地理的な移動に関わる概念で、観光はその旅行の中で目的が労働や勉強とかではなく、楽しむということを主目的とした行動。

2) 旅行会社等が主宰する従来型のパッケージ旅行や観光イメージを払拭するために「ツーリズム」という用語が派生。

3) 近年は「エコツーリズム」や「アドベンチャーツーリズム」などの用例もあり、意識的に使われている。

4) ツーリズムには功罪(ポジティブ&ネガティブ)の2面がある。

5) ツーリズムは起業家精神を高揚させる。

⇒ 観光産業は初期投資が少なく済み、中小零細企業が多くを占める構造

6) ツーリズムには直接的な経済効果と間接的な経済効果があり、最終的には雇用創造や税収増に繋がるが、場合によってはその効果が域外流出する場合もある(例~鎌倉の小町通り、北海道のニセコ)

7) ツーリズムには、観光客の入り込みによって地域住民のアイデンティティが強まり、シビックプライドの醸成に繋がる効果もある。

8) 施設、道路、空港などのインフラ整備によって、観光客目当ての犯罪や観光客自身が犯罪者になるリスクのほか、観光資源の過度な商業化による環境破壊などのデメリットも生じ得る。

9) 地域イメージが先鋭化すればするほど外の人を抱くイメージと実際のギャップが発生したり、住民の思いと異なる方向にまちづくりが進む可能性もある(例~茅ヶ崎市とホノルル郡市の姉妹都市提携はどうか?)

10) ツーリズムはあくまでも手段であり、それを推進する前段で必要な視点は次の通り。

⇒①茅ヶ崎はどんなまちか？ ②これからどんなまちになりたいか？ ③①②のギャップや課題は？ ④そのギャップや課題をクリアするためにツーリズムの推進は有効か？ ⑤どんなツーリズムであればポジティブインパクトが最大でネガティブインパクトが最少となるか？

11)「1万人の人が100回来てくれる観光」を目指すという方向感が良いが、やはり経済効果を生み出し、どう地域内に確保するかが重要。

12)観光推進することで文化や環境に予算をしっかりと付けて、それらを保全することも大切。

13)節度あるツーリズムの推進＝「ライフスタイルツーリズム」ではないか。

14)茅ヶ崎のツーリズムは「内需」主導であるべき。市民にもっと地元で過ごしてもらい、お金を内輪で使ってもらうことが大事。そこから「外需」を拡大して行く。

⇒茅ヶ崎で過ごす楽しみの可視化

15)「非日常」ではなく「異日常」＝他者の日常の経験というコンセプト(例～農家民泊、ワーケーション)が茅ヶ崎にとって親和性が高いのではないか。

⇒演出された観光地ではなくて、その地域に住んでいる人のリアルな生活を体験する。

16)茅ヶ崎の一番の強みは「ビーチコミュニティ」(海をそばに感じながら過ごすライフスタイルを好む人たち)

17)無農薬野菜を作る市民農園でのコミュニティも誕生。

18)南の海と北の緑を守ることで長い目で茅ヶ崎の価値を上げて行くべき。

⇒都会ではできない暮らし

19)コロナ禍で見た新しいまちの顔

⇒自転車で散策し、魚屋さんや公園を発見＝マイクロツーリズム

⇒海と山は川で繋がっていることを実感

3. 意見交換(要旨) 【 】は発言者(敬称略)

【藤本】

・旅行者と地元住民のWINWIN 関係づくりをどう考えるか。

【高井】

・観光客は客だからといって、何をしても良い訳ではない。行く前にその地域のマナー・ルール・歴史を学んでから行こうとか、その地元で作られたものや、現材料がその地域であるものを買おうとか、いろんな意味で、その訪れた地域にちゃんと贈り物＝ギフトを置いていく、そういう観光を進めていきたいというのがツーリストシップ運動。「責任ある観光者」として相手の文化をリスペクトするために学んでおくべき。

・観光の研究世界ではホストとゲストという言葉があり、ホストには観光事業に携わる従業員だけではなく地域の住民も含む。ゲストは観光客であり、ホストとゲストの歩み寄りや相互の思いやりが必要。

・サザンオールスターズのライブは、茅ヶ崎の人たちがホストとして、すばらしい行動をとったし、ゲストの人達も桑田さんの故郷だから大事にしなければということだったかも知れない。

【杉本】

- ・茅ヶ崎が唯一持っている財産で、住民が求めているものは静けさだと考えるが、海岸での人混みやゴミ投棄、犬の糞尿などが現実問題として存在する。
- ・都心に滞在して茅ヶ崎に戻るとその静けさを実感するが、その点においてツーリズムというテーマが今ひとつピンと来ない。
- ・ツーリズムには経済格差が存在すると考えるが、茅ヶ崎のツーリズムはどこを目指すのか。

【山口】

- ・ツーリズムの功罪を検討するのが大変重要。茅ヶ崎らしいツーリズムのメリットや想定される問題点の洗い出し、目指すべきまちの理想と現実のギャップや、何を為すべきかを整理していくことが必要。
- ・オーバーツーリズムのような問題、ゴミ投棄に象徴されるモラルの低下や、生産者意識と消費者意識のバランスなどの点についても共通認識を持ち、ツーリズムの功罪を整理しながら、茅ヶ崎らしいツーリズムを模索すべき。

【滝口】

- ・これだけコンパクトなまちながら、北と南で分かれているのはユニーク。
- ・茅ヶ崎はのんびりしていいまちだが、収入源が脆弱。サーファーなども消費活動はさほど旺盛ではなく、北部にはお金を落とす場所がない。
- ・市内の商店もインターネット上で共通のコミュニティ的なものを立ち上げて、内需、外需ともに取り込んで行くような経済循環の仕組みが必要ではないか。
- ・鎌倉のようなヒストリカルなカルチャーも無い訳ではなく、そこを炙り出す施策が必要。
- ・楽しむという意味でのツーリズム、観光プラスαのものができるまちではないか。

【高井】

- ・滝口委員の意見はいわゆるまちの宝探しだが、住民にも受け入れられる範囲で商品化する取り組みが色んな地域で実践されている。
- ・茅ヶ崎丸ごと博物館と一緒にいろいろまち歩きをしたりしたが、そのツアーを商品にしていくところまでには至らなかった。
- ・歴史的な面で見ても、市内の弥生時代の遺跡などが「歴史の道」のような形で整備できれば、すばらしい資源になる。
- ・市民による宝探し+専門家の視点での商品化に取り組む価値は十分にある。観光協会の動きもコロナ禍で不透明になっているように感じるが、注意深く(戦略)パートナーを選ぶ必要がある。

【小川】

- ・例えば北部のみどりなど、長い目で見て茅ヶ崎の価値を高めるという視点で、そのまま残すべきか、それともまた行きたいと思わせるような整備も含めて実施すべきか。

【高井】

- ・整備すべきと考える。観光案内板や柵、ベンチ設置のほか、飲食ができるスポットなどを景観

に合った形で増やし、お金を落として終わる場所が必要。

- ・すぐには難しいかも知れないが、「フットパス」というのが日本にも欲しい。私権を一部制限するが、茅ヶ崎はやはり歩いて楽しいまちであり、自転車でも高低差があるとは言え、移動しやすいので、そのような整備をすべき。

- ・藤沢市と異なり、相模線があるものの、茅ヶ崎は縦の交通ルートが脆弱なため、自転車の貸し出しポートなどがもっと増えると良い。

【藤本】

- ・ツーリズムについても、生活圏、経済圏、文化圏が重なる藤沢市や寒川町、平塚市などと、自治体の枠をはみ出して、広域連携の視点視野を持つことが必要ではないかと考えるが、全国の先進事例などについて伺いたい。

【高井】

- ・有名なものとしては、「雪国観光圏」(南魚沼、湯沢、群馬の一部)があり、広域観光圏として第1号認定。他には「瀬戸内」や「昇龍道」などがあり、自治体を超えた大きなプロモーションを海外に向けても実施。

- ・その点では湘南地域としても十分可能性あるものの、パワーバランス的に藤沢が大き過ぎ、観光資源豊富なため、組んでも茅ヶ崎へのメリットはさほど無いかも知れない。

【藤本】

- ・2025年7月に道の駅が開業するが、単に茅ヶ崎だけのものにせず、湘南エリアや県域全体のハブ(ツーリズム拠点)として活用すべきと考える。

【高井】

- ・道の駅は積極的に活用すべき。場所的に市民にはちょっと行きづらい課題がある。やはり、住民もそこに買い物にいけるような誘導があると尚良い。圏央道ができたものの、茅ヶ崎を素通りされるという話もあるが、一度道の駅で足を止めることで、産品を買っていただけるチャンスだと考える。住民も今まで知らなかった茅ヶ崎の良いものに出会える場所になれば良い。

【長谷川】

- ・道の駅での買い物はやはり車ではないか。

- ・地域のアイデンティティの部分では、市民は茅ヶ崎が大好きなのだと考える。その茅ヶ崎が大好きだということ自体が茅ヶ崎の魅力であることをどこで表現するか。精神論的なものであり、物を作ったらいいのかということでもない。

【高井】

- ・そのような取り組みは必要であり、まずは発信が重要。茅ヶ崎で暮らすとこんな24時間、7日がある、或いは12ヶ月があるっていう点などについて、もう少し予算をかけて発信して行くことが大切。

- ・茅ヶ崎のことがすごく好きなのに、少しお客さんになっている市民が多いのではないかと。例えば市役所で「お客様」と呼ばれるのにすごく違和感がある。私たちがまちを運営する主体なん

だと思ふ市民が増え、自分はどうしたいのか、こんなことに課題がある、自分たちでやってみるといふまちになっていくべきだと考える。

【杉本】

・議員も含めて茅ヶ崎に住んでいる人がまちを過大評価しているのではないか。イメージが先行して内容が伴っておらず、そこからスタートしなければならないと考える。

【藤本】

・ツーリズムを進めていく中でも、この文化環境が保全されなければならないと考える。南部の道路の狭隘さなどインフラ面での課題があり、鉄道で南北エリアが繋がっておらず、北部に行けばみどりの保全と言いながら、資材置き場のフェンス等で富士山の景色も損なわれてしまっている。そのような現状を市民もきちんと認識して、ツーリストの人たちが来たいと思うような環境を守っていくことも課題と考える。

【高井】

・北部のみどりに関しては不法投棄物が散見され、以前は無かったフェンスが出来て資材置き場になっている状況は残念。また細い道も多くて通行時に怖さを感じる。
・南部の屋敷跡の緑地の喪失も同じく残念であり、議会にも保存に向けて頑張ってもらいたい。

【杉本】

・この委員会がもっと積極的に動かないと行政がみどりを守ることになかなか腰を上げない現状がある。

【藤本】

・ツーリズムの検討を契機に、例えばそういう課題や問題の議員・職員・市民間での共有や、クローズアップにも繋がれば良いと考える。

【高井】

・道路の狭隘や資材置き場やトラックの増加などの問題を、文句を言うだけで政策に繋げることができていないと感じる。市民がお客様にならず、ちゃんと声を届けるべきと改めて痛感している。

【加藤】

・圏央道ができて箱根、熱海、江ノ島、鎌倉エリアを周遊する観光客をどう捕まえて宿泊客を増やすかという点が重要と考えるが、歴史的に見て茅ヶ崎は通過点だった。
・高井教授の発表にある「観光業界の社会関係資本」について伺いたい。

【高井】

・観光業界の社会関係資本は、人的な繋がりでは2種類あり、絆的、同質的、精神的な繋がりやお互いに助け合うという繋がり、もう一つは橋渡し型、普段会わないような、同じ業界でも違うセクターの人や、階層的にも企業の意思決定をする人から現場の通訳ガイドまで含

めたみんなの繋がりがあり、コロナ禍では、それぞれ持っている知恵を交換することができた。

- ・日本の観光業界では、インバウンド需要をコロナ明けに復活させるために準備するなどの関係資本ができていった。
- ・そのような意味で、茅ヶ崎が素通りされる、滞在してもらえないという共通の危機意識を持っている人たちが、自分が持つ知恵などをお互いに公開することで繋がり、オープンイノベーション的なものができるの良い。
- ・滞在観光は日帰りと比べて消費額が大きく変わるので、経済効果の面で重要。但し、どんな人にどこに泊まって頂くか次第で、茅ヶ崎市民が望む形ではないものができるしまうのは良くない。
- ・現在大きな宿泊施設としては東横インぐらいしかないが、新しいホテルを作ることが、茅ヶ崎の強みとして果たして相応しいのか、それとも民泊の形で茅ヶ崎らしいライフスタイルツーリズムを提供するのが良いのかを考える必要がある。
- ・茅ヶ崎らしい滞在経験ができる物件があれば、新規に大きな宿泊施設を建てなくても、滞在型ツーリズムは実現可能。その意味で8ホテルはうまく行っている。

【小川】

- ・南部ではマンションの一室や一軒屋を借りて宿泊可能。

【高井】

- ・学生との合宿を大磯で1棟借りて実施したが、安くて、料理の食材買い出しなどにも便利だった。そういう形のものが、滞在型であれば、まさに茅ヶ崎の静けさとかにも合うのではないか。

【杉本】

- ・南のエリアが人気な理由は松を残したから。美術館あたりとかではまちの洒落たデザインも生まれてくる。高級住宅街は緑があるが、スラム化するところは緑がなくなっている。茅ヶ崎もスラム化しているのではないか。

【滝口】

- ・例えば博物館から道の駅、美術館、里山へ行くと言っても徒歩では難しい。

【高井】

- ・イギリスにはパブがたくさんある。2～3時間歩いてビール飲んで休憩ができるので大丈夫。茅ヶ崎は道の駅から里山は歩くことは難しいが、丸一日かけて途中で相模線に乗ってというルートならコースができると思う。そのルートの中にパブは無くても、既存店が生かせるのではないか。自転車を使う方法もある。

【長谷川】

- ・ポイントとして休憩できる場所と、歩くことや自転車で走ることにストレスの少ない、イギリスの「フットパス」のようなものが欲しい。

【高井】

・今あるものの活用で他にできないものができることによって本物のプライドが醸成される。予算的面を考えると今あるものを使いながら必要な整備をすべき。

【滝口】

・藤沢市からは茅ヶ崎市は知名度だけ突出と指摘される。

【藤本】

・観光資源としての人の魅力度はインパクトが大きい。茅ヶ崎では、数多くの様々な地域コミュニティが存在し、そこに市民ではない方が参加して楽しむというツーリズムの形があるのではないか。

【高井】

・観光客がその町に受け入れられたって、どんなときに感じるか。例えば、地元の人が行くような入りにくそうな居酒屋に入ったときに、すごく優しく受け入れてもらえたら、その人はその場でファンになる。名前がついたコミュニティだけじゃなくて、地元のオーナーが経営しているお店が凄く売りになる。

・茅ヶ崎ではいつも何かが起きていて、いつ行ってもスツと受け入れてもらえるようなイベントが茅ヶ崎では開催できるのではないか。(中央公園での夜市、フリマなど)

4. 副委員長挨拶(省略)

以上